The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	性別役割意識の社会的規定因 : 社会階層とネットワーク
Author(s)	菅野, 剛
Citation	年報人間科学. 1999, 20-2, p. 325-340
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/9953
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

性別役割意識の社会的規定因

――社会階層とネットワーク――

菅野　剛

〈要旨〉

本研究は、現代日本における性別役割意識の規定因を探る。性別役割意識に対して、社会階層論とネットワーク論の2つのアプローチがあるが、この双方の立場は互いに矛盾するものではない。

1995年SSM調査B票データを用いて構造方程式モデリングによって分析を行った結果、先行研究の指摘どおり、男女どちらにおいても、権威主義が伝統的な性別役割意識を高める効果が大きいことが分かった。

また、男性の性別役割意識が年齢と権威主義で規定されているのに対して、女性には様々な規定因があることが分かった。男性と異なる女性における特徴として、(1)ネットワークの広がりが伝統的な性別役割意識からの乖離をもたらすこと、(2)社会階層が伝統的な性別役割意識を高めていること、の2点があげられる。

つまり、女性において社会階層と性別役割意識の相関はあまり見いだされないが、その内実は、権威主義、ネットワークを介した社会階層の負の間接効果と社会階層の正の直接効果であった。

キーワード

性別役割意識、社会階層、ネットワーク、権威主義、構造方程式モデリング

1　現代日本における性別役割意識

D・H・ロレンスの一連の作品においては、没落中流階層出身の教養ある母と、もともと炭坑夫として代々労働者階層である父との生活をモデルとした描写が至るところに散りばめられている。つまり、健康的でさわやかな男らしい労働者階層の男と、上品で教養があり労働者階層から見ればお姫さまのような娘が結ばれる。ところが、男と女とでは出身階層が違うために、ライフスタイルも違う。

そこで描かれている労働者階層では、男は男同士で徒党を組んで遊ぶ。酒場で一杯ひっかけて帰るのが当然だ。男は外で仕事をし、家事・育児には一切口を出さずにすべてを妻に任す。夫は夫自身の友達だけとつきあい、仲間たちと家の外で遊ぶ。そして妻は妻の友達だけとつきあう。

他方、中流階層では、夫と妻は共通の友人を持っていたり、夫婦で一緒に余暇を過ごしたり、社交生活を送ったりする。また夫が家事・育児を手伝うこともある。つまり、労働者階層では性別役割分業が明確であり、夫婦間の役割多重性が低い。他方、中流階層では性別役割分業はそれほど明確ではなく、役割多重性が高い。

このようにライフスタイルが異なる二人が、うまくいくはずはない。中流階層出身の妻は、まわりの労働者階層の女たちにとけ込めない。女たちは、路上で女だけでうわさ話に花を咲かせるが、教養ある女には退屈でしかない。中流階層の家庭では夫と妻とが一緒に娯楽を楽しむものだが、肝心の夫は外でたむろって家に帰ってこない。孤立し苛立つ妻。どうして良いか分からず心が離れていく夫。ロレンスは自分の生まれ育った家庭での経験をもとに、心理描写を文学作品に結実させている。

夫婦の性別役割分業について人々の意見は大きく分けて2つある。一方は、男は外で働き、女はうちで家庭を守るという伝統的な意見。他方は、男も女も従来の規範に縛られることなく、個人の選択を重視して柔軟に分業を行おうという意見。現代日本はめまぐるしく変化している。男と女のあり方も大きく変わってきた。特に、性別役割意識の変化は、単なる個々人の意識の変化にとどまらず、ひるがえって社会全体に対して大きな変革をひきおこしていく。一体どのような要因が性別役割意識を規定するのか？

2　社会階層論からのアプローチ

階層論者ならば、すぐに階層との関連に目がいくだろう。上層は知的に柔軟で伝統に縛られることなく、下層は権威主義的で伝統的な性別役割意識を持つだろう、と。先行研究では、学歴と「男は外で働き、女は家庭を守るべきである」という意識には負の関連があることが示されている(原・肥和野 1990；木村 1998；尾嶋 1998)。また、女性の性別役割意識は年齢と負の関連があることも示されている。さらに、「男性は外で働き、女性は家庭を守るべきである」「家事や育児には、男性よりも女性がむいている」「専業主婦という

仕事は、社会的にたいへん意義のあることだ」に重きをおいた主成分スコアによる性別役割意識に対しても、学歴が負の効果を持っていることが示されている(吉川 1998)。

社会構造のインパクトに焦点をおく社会階層論においては、階層が意識を規定するという図式が用いられる。特に、社会階層の効果は、本質的には職業条件の効果であるという指摘がなされている(Kohn and Schooler 1983; Naoi and Schooler 1985)。ただし、一部の社会意識に対して、客観的な社会的属性を表す階層変数だけではモデルの説明力が充分でないこともある。このため理論的・経験的な蓄積がある権威主義などが媒介的に導入される。例えば、政党支持意識(直井 1988; 直井・徳安 1990)、不公平感(岩間 1994)、ヘルスコンシャス・環境保護意識(吉川 1994)、性別役割意識(吉川 1998)に対する権威主義の効果などが指摘されている。いずれにせよ、社会階層論は、社会構造が個々人を運命づけるという宿命論的色彩が濃い。

3 ネットワーク論からのアプローチ

他方、Bott(1957)は、かなり以前から性別役割分業に対する社会階層の効果を否定している[1]。つまり、近隣や親戚などと親密な関係を持つ場合、その夫婦は様々なサポートを夫婦以外の他者に求めることができ、その集団に様々な点で援助してもらう。そのような親密な関係を持つ集団においては、外部との境目を示すようなシンボル、慣習、規範などが発達する。集団の成員は、これらを所与のものとして肯定し、自ら集団の文化を支えていくのだが、このような集団はたいてい歴史が古い。そして、この中で規範を遵守することが大事となり、密接なネットワークにおいて、規範は強度に共有される。当然、夫婦役割分業についても伝統的な考えが引き継がれていく。

他方、近隣や親戚などと密接な関係を持たず、自立的に何事も夫婦カップル二人だけでこなしていかねばならないような場合、相談も育児も仕事も何もかも手を携えてやっていくしかない。カップルに対して、高圧的に伝統や規範を強いる集団は存在しない。ルースなネットワークでは、規範はどうしても緩みがちとなる。時代や周囲の集団といった外部環境の変化に対して、ルースなネットワークにおいては外部環境に個々人がさらけ出されている蓋然性が高く、対応と順応も早い。彼らは状況に即して柔軟に対応していくことだろう。

日本では、上子(1979)が包括的なレビューを行っている。特に、Bott以後のネットワークと家族の役割分業についての研究のレビューを行い、先行研究での知見が様々であることを示している。また、野沢(1995)はネットワークの形態と役割分業の関連についてさらに踏み込んで指摘している。これらの立場では、ネットワークの構造が個々人を左右するという側面が強調されている[2]。

4　社会階層とネットワークの関連

以上の2つの流れは、相容れないものではない。Bottは、社会階層論への批判を込めて、説明要因としてのネットワークを強調したが、社会階層とネットワークに関連はないのか？　他方、社会階層論においては、ネットワーク変数は脇役であり、重きをおかれずじまいだった。また、ネットワークを所与のものとして捉えるだけでなく、個々人の努力や意志で広げていける側面にも注目する必要がある。さまざまな社会空間を浮遊し、社会的に多種多様な人々と接することで、多様な価値観の併存を許容する柔軟な姿勢を身につけていくことも考えられる。

実は、社会階層ごとに交際のありかたが異なることは、従来から指摘されてきた。例えば、社会的に上層であるほど、社会的に力を持つ他者とのつきあいが顕著であること(Hodge and Treiman 1968; Jackman and Jackman 1973)が示されている。また、階級によってつきあいの形態が異なると指摘もされている(Allan 1977,1989)。さらに、学歴、職業威信や収入などの社会階層が高い者ほどネットワークが多様であることも示されている(Campbell *et al.* 1986; Huang and Tausig 1990)。

日本においても、社会階層とネットワーク多様性の関連が見いだされ、社会階層の効果は、具体的には職業条件の効果であることも指摘されている(菅野 1994)。さらに、双方向因果分析の結果、社会階層が交際形態の多様性を高めることも示されている(村澤 1998)。有力者との関係的資源の保有についても、社会階層との関連が指摘されている(村瀬 1998)。また、社会関係資源が教育アスピレーションに対して有効であることも示されている(安田 1998)。そして、地位の非一貫性や世代間移動という側面も、ネットワークの形成に影響を与えることが示されている(菅野 1998a, 1998b)。また、社会階層の効果はそれほど強くないが、社会経済的地位が高いほど中距離に住む友人数が増えるということも指摘されている(松本 1995)。

5　分析

5・1　データと変数

分析は、1995年SSM調査B票データを男性、女性に分けて行っている。男性、女性ごとに、年齢、学歴、職業威信、ネットワーク、権威主義、性別役割意識など、分析に用いる変数の平均と標準偏差を見たのが表4である。

加齢　加齢の効果を見るために、本人の年齢を用いる。

学歴　学歴は、特に権威主義に対して強い効果を持っていることが指摘されている。

社会階層　社会階層には、さまざまな次元がある。これら複数の次

元の間の不整合も存在しないわけではない(今田・原 1979; 富永 1992)。しかし、いくつかの次元をまとめて、社会階層という一つのおおざっぱな尺度を構築することは、よりシンプルなモデルを示し、解釈を進める上で有効である。本研究では、職業威信、世帯収入、所有財の3つから、社会階層を構築する。

まず、職業威信スコア(直井 1979)は、1995年基準スコアを用いる。男性の職業威信スコアは、本人の職業威信スコアを用いている。女性に対しては、直井道子の分有威信モデルを参考にしている(直井 1989)。すなわち、女性は、本人と夫の職業威信スコアの平均を用いる。なお、無職女性は職業を持っていないため、職業威信スコアも欠測値となる。このため、配偶者がいる場合には、配偶者の職業威

表 1: 第5回社会階層と社会移動全国調査 概要

調査名	「第5回社会階層と社会移動全国調査」(1995年SSM調査)
調査主体	1995年SSM調査研究会
母集団	1994年12月31日現在で満20歳～69歳の男女
サンプル数	B票：男女各2016人(有効回収数 2704人,67.1%)
回収法	個別面接調査
標本抽出法	層化2段無作為抽出法

表 2: 相手の職業威信スコア(1995年B票)

友人か親戚としてつきあいのある職種	1995年職業威信スコア
医師・弁護士などの専門職の人	88.5
会社の社長や役員	78.1
地方議員・国会議員	71.1
県や市町村に勤めている部課長以上の役人	67.2
小売り店主・飲食店主	51.3
一般のサラリーマンやOL	50.2
工場労働者、運転手、土木・建築作業者	50.0
農業や漁業をしている人	46.1

表 3: 変数名と質問項目

Observed Variables	Contents
AGE	年齢
EDU	学歴年数
PRESTIGE	職業威信
INCOME	世帯収入
ASSET	所有財
S_NET	交際職種数
WSD95	つきあいのある職業の威信標準偏差
R39D	権威のある人には常に敬意を払わなければならない
R39E	以前からなされてきたやり方を守ることが、最上の結果を生む
R39F	伝統や慣習にしたがったやり方に疑問を持つ人は、結局は問題をひきおこすことになる
R39G	この複雑な世の中で何をなすべきかを知る一番よい方法は、指導者や専門家に頼ることである
R35A	男性は外で働き、女性は家庭を守るべきである
R35B	男の子と女の子は違った育て方をすべきである
R35C	家事や育児には、男性よりも女性がむいている
R35D	専業主婦という仕事は、社会的にたいへん意義のあることだ
R35F	専業主婦は、外で働く女性よりも多くの点で恵まれている

表 4: 男性と女性のプロフィール

Observed Variable	Man Mean	Man S.D.	Woman Mean	Woman S.D.
AGE	45.33	12.16	44.70	12.02
EDU	12.56	2.64	11.98	2.07
PRESTIGE	52.32	9.14	51.01	7.57
INCOME	9.43	3.31	9.14	3.38
ASSET	4.62	2.08	4.71	2.07
S_NET	5.27	2.23	4.47	2.08
WSD95	10.49	5.73	9.79	6.14
R39D	2.35	1.30	2.28	1.21
R39E	2.14	1.21	2.22	1.16
R39F	2.52	1.29	2.45	1.20
R39G	2.63	1.33	2.59	1.29
R35A	2.40	1.07	2.10	1.06
R35B	2.32	1.09	2.10	1.06
R35C	3.10	.98	2.76	1.08
R35D	3.00	1.02	2.79	1.05
R35F	2.06	.99	2.12	1.00
	n = 772		n = 825	

信スコアを用いている。

次に、回答者の経済的基盤をあらわす代表的な指標として、世帯収入を用いる。

回答者の経済的基盤をあらわすもう一つの側面として、所有財についてもとりあげる。元々は、15の項目で、所有している財産を尋ねている(株券債券、スポーツ会員権、美術骨董品、食器洗い機、応接セット、FAX、電子レンジ、乗用車、持ち家、パソコン・ワープロ、クーラー・エアコン、ピアノ)。所有財については、この総和を求め、これを所有財の指標とした。

ネットワーク多様性　自分のネットワークに含む他者の社会的属性が多様である程度は、人によって大分異なる[3]。ある人は、自分と似たような階層の者との閉塞的・同質的な交際に終始し、他の人は、自分と離れた階層の他者とも幅広く接する。ネットワークが多様であることは、本人がさまざまな社会的な位置を占める他者と交流していることを意味する。このことにより、協力行為や情報の交流を様々な他者と頻繁に行い、自らにないものを取り入れ、他者にないものを与えることによって、様々なメリットを得ることができる。さまざまな職業の他者とつきあっていることは、ただ単に、職業の次元において交際が広いことを示しているのではない。それは、さまざまな社会空間を本人が縦断し交差をしているということをも示している。

本研究では、2つのネットワーク特性を表す指標から「ネットワーク多様性」概念を構築する。

第1に、「交際職種数」を測定する。1995年SSMのB票では、9つの職業に対する友人か親戚としてのつきあいの有無を尋ねている。それらは、地方・国会議員、部課長以上の役人、社長や役員、サラリーマン・OL、専門職、小売り・飲食店主、工場土木建築労働者・運転手、農業・漁業従事者、同業組合・労働組合役員、である。そして、つきあいのある場合に1、ない場合に0とスコアを割り振っている。交際職種数は、測定されている複数の職種についてのつきあいの有無を、単純に合計したものであり、さまざまな先行研究において用いられている(井上 1998; 川端 1998; 木村 1998a, 1998b, 1998c; 菅野 1998a, 1998b, 1998c; 安田 1998)。この場合、0〜9の値をとる。これは、つきあいのある相手の職業それぞれに対

して、意味的に同じ重みを与え、それらとの接触の程度を求めることになる。つまり、職業一つ一つは、個別の生活領域や情報、社会的刺激を含蓄し、象徴している、という考えのもとに、ネットワークの特性を測定している。

第2に、交際相手の「職業威信スコアの標準偏差」を測定する。この変数は、8つの職種のうち、つきあいのある職種についておよその職業威信スコアを割り振り(表2)[4]、その職業威信スコアの標準偏差を求めたものである(菅野 1998a,1998b,1998c)。先ほどの交際職種数という指標との違いは、職業威信スコアによって個々の職業の持つ意味の重みを変えていることにある。また、単に加算して求め、量的な側面を捉えるのではなく、職業威信スコアの類似度という観点から見たバラツキ、いわば質的な側面を捉えている。この場合、たとえば多くの職業とつきあいがあったとしても、それらの職業が職業威信スコアにおいて似通っている場合には、バラツキは小さくなる。

権威主義　権威主義については、質問紙に組み込まれている4つの項目を用いて構築する[5]。

1　権威のある人には常に敬意を払わなければならない
2　以前からなされてきたやり方を守ることが、最上の結果を生む
3　伝統や慣習にしたがったやり方に疑問を持つ人は、結局は問題をひきおこすことになる
4　この複雑な世の中で何をなすべきかを知る一番よい方法は、指導者や専門家に頼ることである

これらの項目は、権威主義を測定するために古くからの先行研究の積み重ねによって練られたものである。尺度としての妥当性・信頼性が高いことが予想できる。

性別役割意識　性別役割意識については、質問紙において6つの項目が組み込まれているが、このうちの5つを用いる[6]。

1　男性は外で働き、女性は家庭を守るべきである
2　男の子と女の子は違った育て方をすべきである
3　家事や育児には、男性よりも女性がむいている
4　専業主婦という仕事は、社会的にたいへん意義のあることだ
5　専業主婦は、外で働く女性よりも多くの点で恵まれている

1つの立場として、これらの質問項目それぞれに対して個別に分析を行うことが考えられる。例えば、木村(1998)、吉川(1998)、尾嶋(1998)は、特定の変数について、詳細な分析を行っている。しかし、本研究では、個別の質問項目が問うていることを直接に分析の対象にするのではなく、その背後に「性別役割意識」という潜在的な要因がある、と想定する。

5・2　性別役割意識の構造方程式モデリング

性別役割意識の規定因を探るために、構造方程式モデリングによって分析を行った。パス図の中には標準化されたパラメータの推定値を示している。パラメータの推定には、最尤法を用いている。な

GFI = .958 , AGFI = .940, Chi-Square = 254.863 , df = 96.

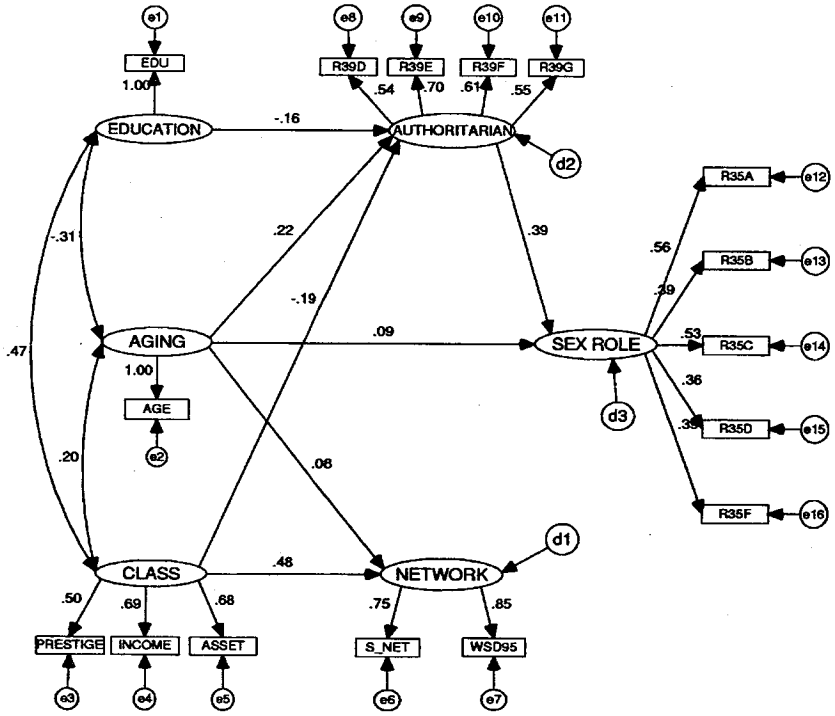

図 1: 男性の性別役割意識の因果モデル

表 5: 潜在変数間の相関(男性)

	EDUCATION	AGING	CLASS	NETWORK	AUTHORITARIAN	SEX ROLE
EDUCATION	1.000					
AGING	-.307	1.000				
CLASS	.470	.197	1.000			
NETWORK	.203	.176	.501	1.000		
AUTHORITARIAN	-.318	.233	-.221	-.088	1.000	
SEX ROLE	-.152	.184	-.067	-.018	.409	1.000

表 6: 潜在変数間の相関(女性)

	EDUCATION	AGING	CLASS	NETWORK	AUTHORITARIAN	SEX ROLE
EDUCATION	1.000					
AGING	-.472	1.000				
CLASS	.468	.011	1.000			
NETWORK	.176	.004	.377	1.000		
AUTHORITARIAN	-.327	.246	-.274	-.103	1.000	
SEX ROLE	-.190	.268	-.030	-.111	.587	1.000

GFI = .961 , AGFI = .945, Chi-Square = 253.517 , df = 95.

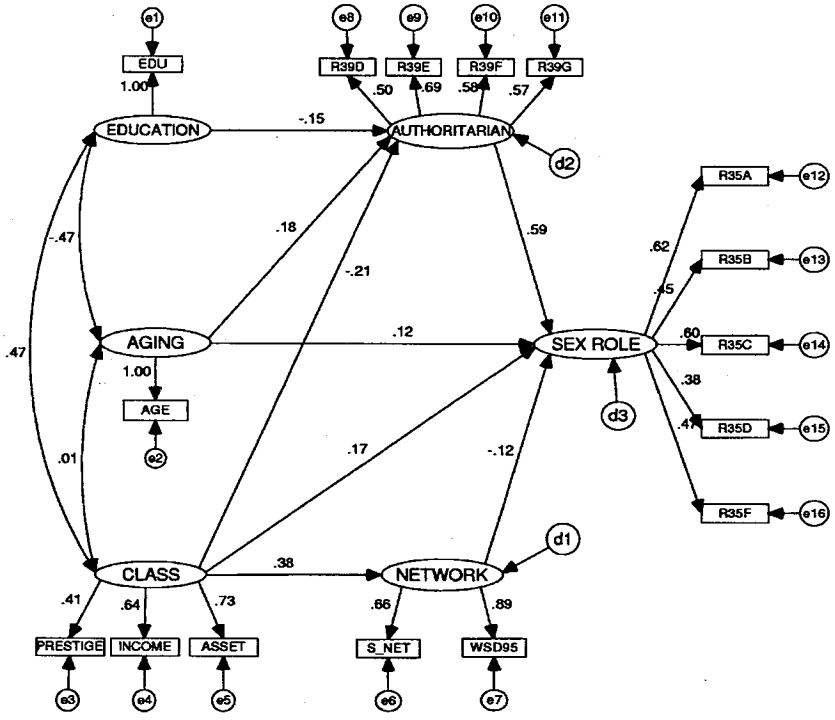

図 2: 女性の性別役割意識の因果モデル

お、モデルにおいて誤差間相関は一切認めていない。図に示してあるのは、男性、女性に分けて分析をした結果である。また、潜在変数間の相関は表5、表6に示してある。

まず、モデルの適合度について述べる。男性モデルでは、χ^2=254.87, d.f.=96, GFI= .958, AGFI= .940, CFI= .926, RMSEA= .05である。女性モデルでは、χ^2=253.52, d.f.=95, GFI= .961, AGFI= .945、CFI= .933, RMSEA= .05である。χ^2/d.f.はいずれのモデルにおいても3以下であり、まずまずの適合度である[7]。

ネットワーク多様性の規定因　潜在変数間の相関を見ると、学歴とネットワーク多様性には正の相関があり、学歴の高い人はネットワークが多様である(男性 .203；女性 .176)。しかし、他の要因をコントロールした因果モデルでは、ネットワーク多様性に対する学歴の有意な効果は消えてしまう。学歴は社会階層を介して、ネットワーク多様性を広げていると解釈できる。次に、ネットワーク多様性の規定因は男女で違う。男性では、階層と年齢がネットワーク多様性を高めている。年齢の効果は、職業生活を続けていくうちに顔が広くなることや、役職が上がっていくことなどをも表しているだろう。そして、ネットワーク多様性の決定係数は .26であり、男性のネットワークは社会階層や職業によって規定されている。他方、女性では、階層のみがネットワーク多様性を高め

ている。また、ネットワーク多様性の決定係数は .14であり、男性に比べて低めである。女性のネットワークは、今回のモデルに含まれていない、社会階層以外の要因にも影響を受けている。

権威主義の規定因　潜在変数間の相関を見ると、ネットワーク多様性と権威主義の間には、負の関連がある(男性 -.088、女性 -.103)。すなわち、ネットワークが多様である人ほど権威主義的ではない。しかし、他の要因をコントロールした因果モデルでは、権威主義に対するネットワークの効果は男女共に有意でない。ネットワーク多様性と権威主義の負の関連は、社会階層による疑似相関といえる。また、因果モデルを見ると、権威主義の規定因が、男女共に非常に似通っていることにも気づく。つまり、学歴と社会階層が負の効果を持ち、年齢が正の効果を持っている。また、決定係数は男性は .14、女性は .15である。

性別役割意識の規定因　潜在変数間の相関では、男性において社会階層と性別役割意識にかすかに負の相関が見出される(男性 -.067)。この限りでは、確かに、社会的上層ほど伝統的な性別役割意識を支持しないことが男性においてかすかに認められる。しかし、因果モデルでは社会階層の効果は消えてしまう。他方、女性においては、社会階層と性別役割意識に相関はほとんど見られない(女性 -.030)。しかし、因果モデルにおいて他の要因をコントロールした結果では、社会階層は実は性別役割意識に対して正の効果を持っている[8]。年齢、権威主義、ネットワーク多様性が一定である場合には、女性は、社会的に上層であるほど伝統的な性別役割意識を支持している。

また、性別役割意識の規定因は、男女で大きく異なる。男性では、年齢と権威主義が性別役割意識を規定する。因子間相関を見る限りは学歴も性別役割意識に負の関連を持つが(-.152)、これは権威主義を介した効果が大部分を占めている。また、社会階層が効果を持たないことにも留意する必要がある。ただし、男性においては、性別役割意識の決定係数は .18であり、低めである。

女性においても権威主義がもっとも大きな関連を持っていることは、男性と同様である。ただし、さまざまな要因が作用していることが特徴となっている。特に、女性では、社会階層が性別役割意識に対して正の効果を持つ点が男性と異なる[9]。さらに、ネットワーク多様性が性別役割意識を低める負の効果を持っている点も男性と異なる。女性では性別役割意識の決定係数が .39であり、男性に比べてかなり高い。

女性における社会階層の直接効果と間接効果　女性の因果モデルでは、社会階層と性別役割意識の間に介在するネットワークが面白いポジションを占めている。社会階層が高い女性ほど、性別役割意識が伝統的なものになっている。この理由は、未だに男性中心の現代日本社会では、社会階層が高いほど、男が外で働き、女がうちを守るという図式が効率が良いから、と考えられる。

しかし、社会階層はネットワークを広げる効果を持ち、ネットワ

ークが広い者ほど、伝統的な性別役割意識から遠ざかる。さらに社会階層は権威主義を低める効果も持ち、権威主義的でない人は伝統的な性別役割意識から遠ざかっていく。つまり、社会階層には、伝統的な性別役割意識を形成する正の直接効果があり、しかも、伝統的な性別役割意識を瓦解させる負の間接効果もある。社会階層と性別役割意識の潜在変数間の相関としては、あまり関連が見いだせないが、その内実は、正の直接効果と負の間接効果であった。

6　まとめ

社会階層が高い女性ほど、「進歩的」な意識を抱き、伝統的な性別役割意識からは乖離していそうなものだが、必ずしもそうではないらしい。そもそも、潜在変数間の相関はあまり見られない。しかも女性においては、他の要因をコントロールした後に、社会階層が伝統的な性別役割意識を高める効果が見出された。

性別役割意識のラグランジュ・ポイント　社会階層的に上層であるほど、女性は自立して、思想的に進歩的でありたい。しかし、働く必要はなく、経済的なゆとりがある。現状の贅沢はやめられない。このため、上層であるほど女性は、現状肯定的な意識を抱くようになる。

社会的に下層になるほど、男女を問わず権威主義が高まることによって伝統的な性別役割意識が高まる。男性側からすれば、亭主関白でいられる。しかも、女性は働いてもくれるのである。女性は家にいたいが、子供の教育費や生活費を捻出せねばならない。「男性は外で働き、女性は家庭を守るべきである」などとのんきなことは言っていられず、働かざるをえない。

性別役割意識のマッチング　また、権威主義を介してのメカニズムが男女共にはっきりと見出された。つまり、社会において選択的交際や同類婚が生じていることを考慮すると、社会階層ごとにカップルの性別役割意識はうまくマッチしていそうだ、という推論できる。

男性では、年齢と権威主義が性別役割意識に影響を与えている。そして、本人が意識的にネットワークを広げたり、周りの人が本人の交際の幅を広げてあげたりしても、本人の性別役割意識に依然変化は生じない。そして、権威主義は階層によって影響を受けている。良きにつけ悪しきにつけ、男性は社会階層に取り込まれている。

他方で女性の場合、権威主義の効果は男性と同様に強いとはいえ、ネットワークを広げることで、柔軟な、時代に即した性別役割意識を獲得する可能性がないこともない。社会階層において上層であるほどネットワークが広がるが、ネットワークが広がることによって、女性は伝統的な性別役割意識を持たなくなる。他方、男性にはネットワークの効果は無関係である。よって、社会的上層では、ネットワークの効果のために夫婦の間で性別役割意識に若干の乖離の可能性が残っている。女性において、ネットワークの広がりが性別役割

意識を変化させる効果を持つのは、逆に言えば、女性の生活空間・領域がまだまだ狭いためであるからかもしれない[10]。妻は家に閉じこめておくに限る、といういかにも男性本位的な意見を耳にすることがあるが、これも世界の広がりによって夫と妻の価値観が食い違って家族が崩壊してしまうことを未然に防ごうということだろう。ネットワーク多様性は、様々な他者との自由で開放的なつきあいを表している[11]。女性において、ネットワーク多様性の決定係数が低めであったことは、社会階層以外の要因が女性のネットワークに影響していることを示している。社会階層に縛られることなく女性が自ら広げていくネットワークのあり方は、今後さらに進展していくだろう。これによって、社会階層がもたらしていた、夫と妻の性別役割意識のこれまでの均衡状態が、今後どのような推移をたどっていくのかが注目される。

付記　本研究は、SSMライフスタイル班研究会(1996.10.2)での配布資料「説明要因としての交際形態―階層帰属意識・不公平感・権威主義・夫婦役割意識―」に対し、SEFAによって性別役割意識の指標を選択し直して加筆修正したものです。また、本研究は1995年SSM調査研究の一環としておこなったもので、データの使用および結果の発表にあたって同研究会の許可を頂きました。ここに記して感謝の意を表します。

Notes

(1) Bottは、ネットワークが本人に対して様々な影響を及ぼすことを明確に述べ、社会階層論に対して鋭い批判を行っている。たとえば、階層帰属意識を説明するために、社会階層変数を投入する従来の分析枠組みを痛烈に非難する。Bottの調査によれば、社会階層と夫婦分業形態との関連はほとんどみられなかった。むしろ、その家族がどのようなネットワークを持っているかが、家族内の夫婦分業にもっとも影響を与えているという。

(2) ネットワークは、性別役割意識に対してのみ効果を持つのではない。実際、社会意識に対するネットワークの効果には様々なものが存在し、既に分析においても明らかになっている(Kadushin 1982,1983; Bienenstock *et al.* 1990; 川端 1998; 木村 1998a, 1998b, 1998c; 菅野 1998c; 安田 1998)。

(3) 1995年SSMの項目ではネットワーク密度は測定されていない。そこで、ネットワークの別の側面を取り上げることとし、ネットワーク多様性を用いて分析する。先行研究では、ネットワークの密度と多様性は負の相関を持つことが指摘されている。

(4) 「同業組合・労働組合役員」とのつきあいについては、これらが職業というよりは名誉職であり、職業威信スコアが特定されていないため、この指標の構築からは除いた。

(5) 権威主義と、性別役割意識については、5段階で尋ね、以下のように用いた。
「そう思う」=5、「どちらかといえばそう思う」=4、「どちらともいえない」=3、「どちらかといえばそう思わない」=2、「そう思わない」=1としている。

(6) 6つすべての変数から性別役割意識を構築する場合、因子分析のモデルの適合度がよくない。そこで、分析の結果、「女性も、自分

自身の職業生活を重視した生き方をするべきだ」という項目を除いた。分析には、Stepwise EFAを援用した(狩野・原田 1997; 狩野・原田 1998; Kano and Harada 1998; Harada and Kano 1998)。

(7) 性別役割意識の測定指標は男性よりも女性の方が値が若干高めである。また、男女どちらにおいても、「男性は外で働き、女性は家庭を守るべきである」と、「家事や育児には、男性よりも女性がむいている」の値が高めであり、潜在概念は伝統的な性別役割意識を表している。測定指標の値は .7以上が望ましいが、理論的・経験的蓄積のある権威主義においてさえ、.7以上のパスが一つしかないことを考慮すると、性別役割意識の影響指標の値が若干低めでも致し方ない。

(8) なお、妻の家計参入度という非常に興味深い変数を、吉川(1998)は用いている。その指摘どおり、潜在変数を用いない重回帰分析において、妻の家計参入度は確かに強い効果を持っている。この変数も、一指標一概念の潜在変数としてモデルに組み込んでみたが、女性における性別役割意識に対するネットワークの効果は強まりこそすれ、弱まることはなかった。本研究における理論仮説における位置づけとの兼ね合いもあり、ここではとりあげていない。

(9) 分析は省略するが、有職、無職に分けても社会階層の効果は同様であった。

(10) もちろん、広く浅いネットワークが全ての生活領域においてメリットがあり、機能的であるとは言い切れない(上野 1988)。しかしながら、幅広いネットワークを持ち、幅広い選択肢を持った上で、自分のつきあう相手を絞っていくことが簡単であるのに対し、もともと選択肢がせばめられている場合には、ネットワークを広げていくことは困難であり、多くのコストを必要とすることには留意する必要がある。

(11) ネットワーク多様性にくらべて、権力や社会的勢力層とのコネやツテの側面を表す勢力ネットワークの方が、階層変数による重回帰分析において決定係数が高い(菅野 1998a; 1998b)。

参考文献

Allan, G. 1977. "Class Variation in Friendship Patterns." *British Journal of Sociology* 28: 389-393.

Allan, G. 1989. *Friendship: Developing a Sociological Perspective.* Harvester Wheatsheaf. =1993 仲村祥一・細辻恵子訳『友情の社会学 ネットワーク、操作者、コアリッション』世界思想社

Bienenstock, E. J., Bonacich, P. and M. Oliver. 1990. "The Effect of Network Density and Homogeneity on Attitude Polarization." *Social Networks* 12:153-172.

Bott, E. 1957. *Family and Social Network.* Tavistock, London.

Campbell, K. E. and Marsden, P. V. and J. S. Hurlbert. 1986. "Social Resources and Socioeconomic Status." *Social Networks* 8, 97-117.

原純輔・肥和野佳子 1990「性別役割意識と主婦の地位評価」岡本英雄編『現代日本の階層構造4 女性と社会階層』東京大学出版会165-186

Harada, A. and Kano, Y. 1998. Stepwise EFA プログラム 大阪大学人間科学部

Hodge, R. W. and D. J. Treiman. 1968. "Class Identification in the United States." *American Journal of Sociology* 73: 535-547.

Huang, G. and M. Tausig. 1990. "Network Range in Personal Networks." *Social Networks* 12:261-268.

今田高俊・原 純輔 1979「社会的地位の一貫性と非一貫性」富永健一編『日本の階層構造』東京大学出版会161-197

井上 寛 1998「社会階層志向かそれとも脱階層志向か」1995年SSM調査シリーズ20今田高俊編『社会階層の新次元を求めて』45-56
岩間暁子 1994「社会的不公平の認知メカニズム ― 権威主義および無力感との関連―」『現代社会学研究』7: 100-122
Jackman, M. R. and R. W. Jackman. 1973. "An Interpretation of the Relation between Objective and Subjective Social Status." *American Sociological Review* 38:569-582.
Kadushin, C. 1982. "Social Density and Mental Health." pp.147-158 in *Social Structure and Network Analysis*, edited by P. V. Marsden and Nan Lin.
Kadushin, C. 1983. "Mental Health and the Interpersonal Environment: A Reexamination of Some Effects of Social Structure on Mental Health." *American Sociological Reveiw* 48:188-198.
上子武次 1979『家族役割の研究』ミネルヴァ書房
狩野裕・原田章 1997「因子分析における変数選択―変数増加法―」『日本行動計量学会第26回大会発表論文抄録集』
狩野裕・原田章 1998「因子分析における変数選択.変数減少法」『第66回日本統計学会公演報告集』111-114
Kano, Y. and Harada, A. 1998. "Stepwise variable selection in factor analysis. Technical Report DATA98-03." Osaka, Japan.
川端 亮 1998「階層意識に関わる変数の探索 ― 地位的変数と関係的変数を中心に―」1995年SSM調査シリーズ14 尾嶋史章編『ジェンダーと階層意識』81-92
木村邦博 1998「既婚女性の学歴・就業形態と性別役割意識」尾嶋史章編 1995年SSM調査シリーズ14『ジェンダーと階層意識』23-48
木村好美 1998a『社会階層と自己認識 ―男女の比較を中心に―』『年報人間科学』19:115-128
木村好美 1998b『高齢者の社会的地位とライフスタイル ―役割喪失と社会階層が価値意識・自己評価に及ぼす影響―』1995年SSM調査シリーズ17 白倉幸男編『社会階層とライフスタイル』125-134
木村好美 1998c『「自己実現」と都市的ライフスタイル ―社会階層と都鄙度の及ぼす影響をめぐって―』1995年SSM調査シリーズ17 白倉幸男編『社会階層とライフスタイル』175-189
吉川 徹 1994「現代社会における権威主義的態度尺度の有用性」『ソシオロジ』39:125-137
吉川 徹 1998「性別役割意識の形成要因 ― 男女比較を中心に ―」尾嶋史章編 1995年SSM調査シリーズ14『ジェンダーと階層意識』49-70
Kohn, M. L. and C. Schooler. 1983. *Work and Personality: An Inquiry into the Impact of Social Stratification*. Norwood: Ablex.
Moore, G. 1990. "Structural Determinants of Men's and Women's Personal Networks." *American Sociological Review* 55,726-735.
松本 康 1995「現代都市の変容とコミュニティ、ネットワーク」松本 康編『増殖するネットワーク』勁草書房
村澤昌崇 1998「階層文化と交際」1995年SSM調査シリーズ18 片岡栄美編『文化と社会階層』159-169
村瀬洋一 1998「関係的資源保有の格差と規定因―有力者との人間関係を指標とした政治的影響力の階層構造―」1995年SSM調査シリーズ7 片瀬一男編『階層意識の現在』131-150
直井 優 1979「職業的地位尺度の構成」富永健一(編)『日本の階層構造』東京大学出版会434-472
Naoi, A. and C. Schooler. 1985. "Occupational Conditions and Psychological Functioning in Japan." *American Journal of Sociology* 90:729-752.
直井道子 1988「職業階層と権威主義的価値意識」『1985年社会階層と

社会移動全国調査報告書 第2巻 階層意識の動態』1985年社会階層と社会移動全国調査委員会 225-242
直井道子 1989「女性の階層帰属意識 ―女性の地位の借用モデルと独立モデル―」『1985年社会階層と社会移動全国調査報告書 第4巻 女性と社会階層』1985年社会階層と社会移動全国調査委員会157-178
直井道子 1990「階層帰属 ―女性の地位借用モデルは有効か―」岡本英雄編『現代日本の階層構造 4 女性と社会階層』東京大学出版会147-164
直井道子・徳安彰 1990「政党支持意識 ― 1985年まで自民党支持率はなぜ減らなかったか ―」原純輔編『現代日本の階層構造 2 階層意識の動態』東京大学出版会 149-172
尾嶋史章 1998『既婚女性の学歴・就業形態と性別役割意識』尾嶋史章編 1995年SSM調査シリーズ14『ジェンダーと階層意識』1-22
野沢慎司 1995 松本 康編『増殖するネットワーク』勁草書房175-273
菅野 剛 1994「社会階層と人々の交際形態」白倉幸男編著『現代の社会階層と社会意識』社会移動研究会65-86
菅野 剛 1998a「社会階層と社会的ネットワーク ―地位の非一貫性と社会移動の効果―」『年報人間科学』19:101-113
菅野 剛 1998b「社会的ネットワークの趨勢 ―75年と95年における社会階層の効果の変遷―」白倉幸男編 1995年SSM調査シリーズ17『社会階層とライフスタイル』271-292
菅野 剛 1998c「社交類型と社会意識 ―媒介装置としてのネットワーク―」白倉幸男編 1995年SSM調査シリーズ17『社会階層とライフスタイル』205-218
富永健一 1992「戦後日本の社会階層とその変動 1955-1985年」東京大学社会科学研究所編『現代日本社会 6 問題の諸相』東京大学出版会429-495
上野加代子 1988「中高年女性のソーシャル・ネットワーク ―有配偶と無配偶の比較分析―」『家族研究年報』14:73-86
安田 雪 1998「職業アスピレーション：教育かネットワークか」1995年SSM調査シリーズ9 岩本健良編『教育機会の構造』95-112

Social Determinants of Sex-Role Orientation.

Tsuyoshi SUGANO

In this paper, I clarify social determinants of sex-role orientation.
Preceding research has shown that authoritarian conservatism and Network Density have significant effect on sex-role orientation, though none research has treated both factors at the same time.
Upon 1995 SSM B survey data, the followings are clarified by the method of Structural Equation Model with latent variables.

First, authoritarian conservatism has highly significant effect on sex-role orientation on both gender, i.e., the more authoritarian one is, the more traditional sex-role orientation one has.
Although the first-order correlation between social stratification and sex-role orientation is weak, indirect negative effect of social stratification upon sex-role orientation via authoritarian conservatism is confirmed.

Second, opposite to hypothesis based on the relationship between social stratification and intellectual flexibility, it is clarified that there exists positive direct effect of social stratification on traditional sex-role orientation among women.

Third, network diversity turns out to have negative effect on traditional sex-role orientation in women, i.e., the more diverse network one has, the more non-traditional sex-role orientation one has.

Taking these into accounts, in the near future, increasing women's diverse network shall unbalance the apparent no correlation between social stratification and sex-role orientation..

Key Words

sex-role orientation, social stratification, network, authoritarian conservatism,
stractural equation modeling with latent variables.